

「ジャンケン文明」と「コイントス文明」の違い

～ 絶対的勝者がいないジャンケン文明 ～

東洋の思考様式は、欧米式の効率主義とは少し離れたところから発想しています。

今の世の中の動きを見ていると、明治維新以来 140 年に及ぶ、日本の近代史の歩みがあまりにも欧米偏重だったことを見直すべきだと考えているからです。

「ジャンケン文明論」によると、ものごとの順番を決めたり何かの意思を決定したりするとき、一般にアジアの子供たちはグー(石)・チョキ(鉄)・パー(紙)のジャンケンをするが、欧米の子供たちはコイン投げで決めるという

コイン投げはコインを使って、独りでもできる。ジャンケンを使うので道具はいらぬが、複数の人間が必要になる。コイン投げは表か裏で意味が決まるが、ジャンケンには相手が何を出すかによって異なった結果になる。グー・チョキ・パーの「三つ巴」の力関係の中で、絶対的な勝者は存在しない。

いつも関係性の中で勝者が決まるのである。

この「三つ巴」構造は、オリンピックの金・銀・銅メダルのような垂直的・階層構造ではなく、丸い形の循環構造になる。それは中国の陰陽・五行説や相克説の循環構造と似ている。

グーとパーは陰陽であり、夏と冬である。

チョキは春秋の彼岸の中日に当たり、夏と冬を分ける働きをしているという

つまりジャンケンには陰陽の世界観に由来するというのである。

コイントスのように常に勝者と敗者を択一的に決めながら西洋的な思考に対して、ジャンケンのように絶対的勝者や絶対的敗者は誰もおらず、三者が並存し、時に勝ちときに負けるという構造を受容する東洋的思考は、これからの企業における経営にとって大切な基盤になると感じます。

人間も組織もそれぞれに個性があり、その人その組織にしかない能力を備えている。

この能力をビジネスの上で上手に組み合わせ、それぞれを活用してこそ独自の質が生まれる。

21 世紀は、東洋の知を学び直し、東洋の知と西洋の知を統合させた「第三の知」の体系を創り上げることが大きな課題になる。

東洋には実に深遠な知の体系がある。その一つ、易の哲学においては、私たちを取り巻く世界はすべて陽と陰の「対」で成立している。陽と陰は互いに対立しながら同時に相手を求め合う

対立的なものは、じつは相互に補完的な関係にある。

ものごとは独立して存在せず、相互依存の関係にあると考えるのである。

<コメント>

禍福はあざなえる縄の如し、絶対に悪かったり良かったりということはない。

二本の撚り合わせた縄のように、良いにと悪いにとは表になったり裏になったりして交互に回る。

けって悪いことだけということはない、と相対的に考えるのだ。

先に進むだけが能ではない。

時に休んでエネルギーを蓄える、タメをつくる、アソビをつくるには時間が必要なのである。

人は循環の中で動くのを待つのである。君子は器を身に隠し、時を待ちて動く、易経

人間はどんなに才能に恵まれた人でも、それを発揮する機会はあらかじめ決められている。だから、その時が来るまでじっと待ちなさいと教えているのである。